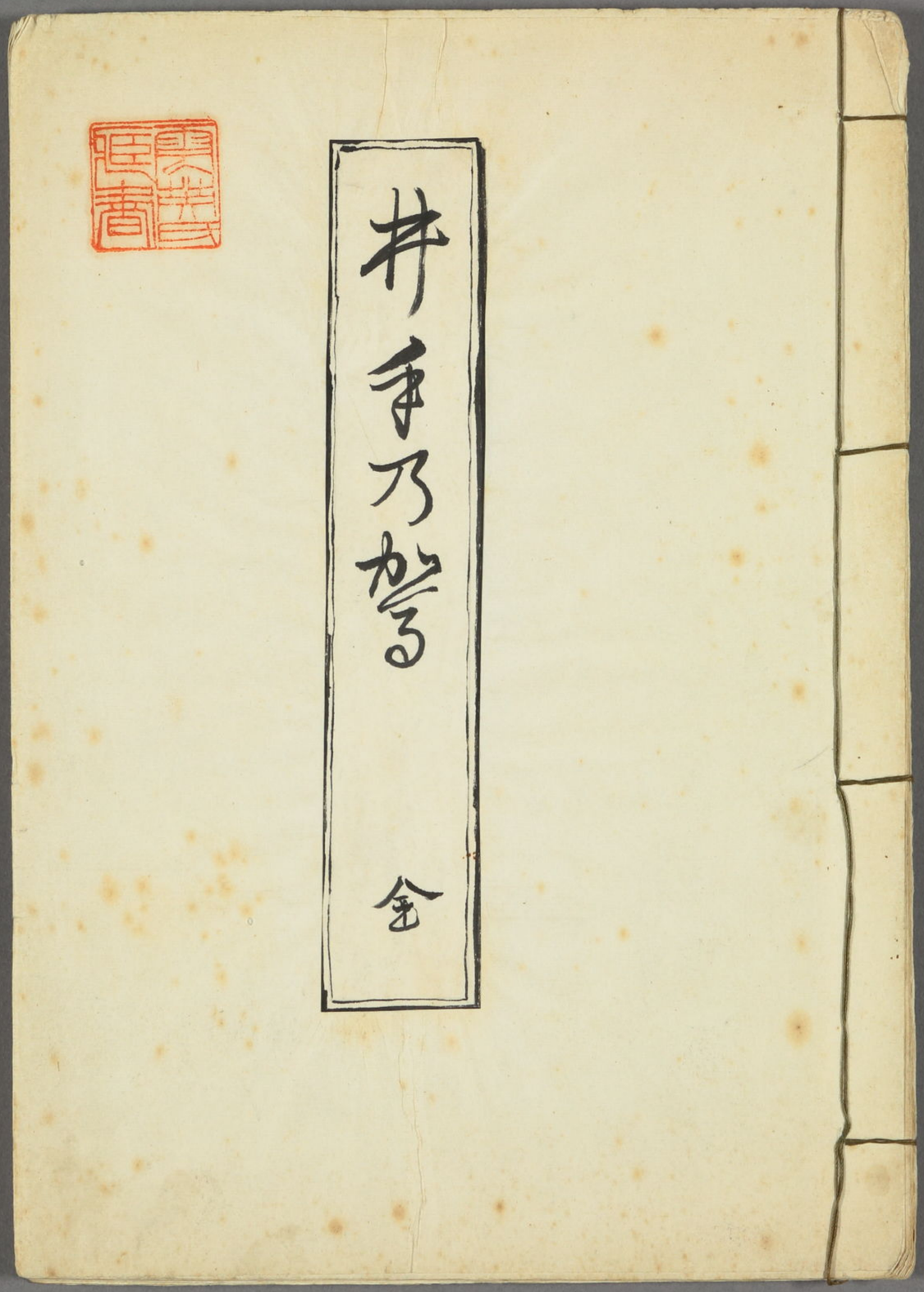
井手乃磬
全

神奈川県立図書館

神奈川県中郡二宮町二宮笑の家
不意出家致候段御聞及なり今年
十七年の恩忘
れ難き御厚情の
志を等し法会を以
て高き丹誠を拘て香華等を
持て御礼を謝す者とて
さ様は高き不思議なるもの

行りきこしみ月のはつ花
難波の浦人のをるをり初雁の
聲をりに古き給ふを給ふる
太祖や祖翁の古蹟にしく
なしも世よもあらじ除夜の歌
あり中ごろ和漢の賓客を
任ぜ心地もかくやとぞ覚ひよ
殊に俳てをる俳て歌ぞ添
を書ふ巾類万秘めぞ書も

如意寺の住職を正面に
日ぬ文庫のはしめすし蓮て
服をるの八月の表をなぬ
をる諸国乃風俗よをく後の
表を色ぬて比をひの嗣を
拾ふに四時の吟妙をの添れ
をものの小冊とハ高れ
こしを井の磐と号て世に
拾ふ遊せんとおもの稿の集に

て人丸似ものしらぬ世
の
宝暦十三癸年 初冬
東奥信夫
呑溟謹書

芭蕉翁

山崎一井手の辺りを時雨ける
枯野をたゞ道の一筋　呑溟
何もなき日ハ飽も来ふて　蘭雅
ひゝ流れ膳よ酒ハあふぶい　支陵
脱捨る泥をたゝ夫か布しよめ　猪白
強シてやらふ濡よの空解　暁水
雲をあうぶだてふど鶯の月　指月
我も中よき庶の友うち　凉花

其二

谷水の空に消てや加しくれ　東都　秋瓜

末の宿よ富士見の白雲　霜後

先へ出る月の八重咲ぶふるゆて　至芳

三瓜ふ咲の花てふるひ　白芝

醉ひ森て起て醒ぬもおもしろい　巨釣

今鶴うゝ来ふれと湖の面り　飛来

如月見ても月の立てゝい松たゝり　柳志

楓の下にぬ風ゝ照　鶴　木鶏

其三

待ゝて山八瘦ゝうつもつ叶雨　湖南

夕田よ鴨の屋ゝ　可風

三彩乃茶屋ゝ三人寄ゝ　湖夕

寄ゝ彩奇の清ゝ　汀雨

狂歌ゝしゝも津ゝ　亀石

徐のかし場よ富ゝつもあゝ　暗居

聴鳥は泊ゝ月の月　松望

老い鳴よ余沉の秋しゝ　泰勇

兵四

遠江掛川

時雨てもむしろ焉　周竹

湖宮まの夕くれ　之園

硯荷の書れぬもまま命とて　荣路

一口酒よ老をなくさむ　阿郎

小鼓よ藤合の酒子静乙　露堂

むらしもかゝ原巷の内遠　一鳳

公るまをゝ桂の男ふり　巴陵

都へつゝ彩萩乃ち手枕　野麦

兵五

播陽姫府

桂の葉に雪降ふる時雨哉　寒風

松ハ袋よ十月の菴　空洞

第浜ふ彩を流よ筋ほけて　桐圭

見しらぬ雪のまふふ河　丁先

金屏の画も高まぬる新かゝ　鶴羽

京へのたより告て来る児　寒鳥

桂影かゝ水を発逝るとゝ　史章

出乃甲斐ふく寄を名よ呼　魚貫

題六

皇都

時雨降る比以桶の糊のかちくちゝ　蝶夢

椽の上まで水ぬらしく　竹牙

案内者ハ今宮ゑびす仕形して　子鳳

後の時年ハ午時より下つゝ　啞佛

稽の波よ踏しらす孫　泡屑

引ぬもおしい哉ゝ　仙

何ぞうも枕を月乃寄ふけ　用舟

神の庵ゝ笛の弦ゝゝ　安里

筆

題七

武州鳴巣

秋来ぬと唐土の油ぬや初時雨　栁几

垣根ハ今をおさまらぬ草　栗夫

五枝ゝ向うハ谷を見おろして　兎後

武士ともあらぬ行おし此秋　惟山

常メてうゝ捉物かふくゝ川ゝ川　青牛

さらいしくよりゝ敷屋越　冬花

窓の巣も世をあちさやの花ゝ月　和翠

人のおゝろ奥もをいゝ　東園

東都

葵太

乳峰

雷堂

嵐坡

魚汝

夢旦

宝車

飛鯨

楠ちらす松よ落くや初しぐれ

客ぞ名残の紫陽花

唐僧の側うら侍者の夜名付て

かるの道をもひと世芋掘り

南口よ聘市の秋惜まるる

阿波産鳥よ月を夕義

柿ぬ〜の去年も来れそよ艸も

七十年ぶの 魂 柳

名詠

本食の笠ぬけ〜るる高くれし

海まてハ海士も笠着る時雨哉

岩はハれぬ海さきの濤や初時雨

菜ぬまとは青を布しるふしる形

川越ハ天高そうのしみれ孔

稲妻よ照り付くる時雨哉

霜よ寒る高山も雲や初時雨

呑溟

蘭雅

江都 至芳

巨釣

柳志

京都 春信

孤来

炉のうへつと歌を吹消て時雨哉　白芝

積るとも解る井やたつ時雨　木鶏

啄木の一ちらつかしく秋哉　鴻巣　兎陵

松原を潜て出るる高く哉　青牛

刈田を八届ぬ中や初しくれ　東園

片枝ハ乾くも有たつしくれ　惟山

初時雨皆うつる窓も有り　和翠

まくまくぬ里も有り冬初しくれ　冬花

仙人ハ多ハめて通ぬしくれ哉　栗夫

時雨亭にて

筆ゑ行彩の赤やとかしくれ　既白（カ）

日のうつ〳〵見臺向て時雨うち　桐圭（トタチ）

松風ハ冴吹くしくれ哉　丁先

時雨よりいとゝぬ人や冬　史章

ふつゝき嘶去つまるしくれ哉　鶴明

一中のうつ栗津が原へしくれうち　師竜

倚て琴仰て松乃しくれ哉　魚貫

うゝての世を帰て見よ初時雨　左傳

暗の夢さめし時雨のみ紫代　、含我
松風を考へ初めし初しぐれ　、一茶
二葉より古枝門をうりしぐれ　、丹山
川音にて塩浜を思ふ初しぐれ　、保孝
蜻蛉の今ハ世なるなり初時雨　、席帆
祖翁法しては七十年の今
その秋流の下紅葉ハ面やり

年よりも　と誰うたあゆゝし初時雨　、寒雨

皇角子の言よ詩止むしぐれ　東奥樹田　桃黒

余興

萩物花情ゝ撫る物ゆゑ　指月
咲ふ笠て思つめて抜る指板引　楮白
湾一ツ花て色深ふ　蘭雅
ゝ枯ゆ淋しう帰ゝ　里鶴
図面を表乃動う表月見の形　暁水
面白う時計をしゝむしの音　三耳

冷水に出花はとつまき昆布　涼花
手ぬぐひ日は蚊帳の中の子特　青柳
旅渡の軽きぐうへやて俳諧　奇水
水上は足の蓮や加茂川　水雅

蛇の来て花乃口切る指板う形　呑溟

南都懐旧

九重も八重もむらさきつの蕃　掛田流之
色うへぬものもと少とつ接の月　宗杉可夏

たつ雲や升おろ和と思ひ寸　迎車
八朔や蕎のうへよ田乃白し　卜而
鼠川蕎麦ひろ雲き鄙ぶ　邵山嘉秀
宮の帰蕎ハ何くふ月　蒙滴
弦花めよ男のしまるちゃまふ　八丁目古笛
鶏の寒り来蕎く蕎和　本吉青彩
細くと蕎の数ものや時雨　篤甫
鏡ぶ蕎拾ふ蕎ふ聴寺ふ　竹庵東鯉
夕立やこ飯蕎へのホ浴さへ　丈芝

道すてもりたるうの山　櫻
秋嵐の軒端へ庭ふる花　芭蕉
うつくしう咲よつけてもあるる
菊の香や花咲奥のかくれ里
和の音や鶏鳴くぬる雪を踏て
古川や水ながるる柳　氷
日還の心底してはつさくら
さぬ色ハ合歓も眠るる秋の暮
ぬ月やまと蝶ちる山　花

白石　螺
越後　枝風
山形　千和
風浮
大河　雪魚
保京　玉川
浪花　日國
湖東八幡　伯房
加賀　麦水

行く川やきのふ乃むかしの俤
出てこゝ水ハ原けたく其の夕部ゆ
幾筋と川引裂てかすみ哉
抜ゝ人こゝ立ゆし衣の
一ツ花ふるのり糸や秋の雨
こうろぎと邪こ枕や土用干
鄙猫ハ中と抜ハ也て冬菜ふ
下冬の上ゆ月ハ冬ハ
腹ふるゆのしむ時千鳥うゆ

越中富山　素圓
麻父
湖東八幡　吐虹
左峯
京　紫芝
湖南栗津　蝶夕
可風
文鳳

水流ゆきみのうやうつもさ　京都　涼袋
陰ゆの色松ゆ男うもこ茶つし

名月や池のてよ松の影白き　秋瓜

あひと人鯛魚すこ川や冬の秋　蕨太

歯ゆしうるうるや赤絨ゆきゆ秋　雪堂

赤ゆ茶てこんとうおうき冬葉八　尾州名古屋　多申

や月　

先

書呑溟察井手乃駕後
王垂訓風教大洽人詠國歌
以自娛矣蓋自蕉翁之輩出
變其體裁名曰俳詠縟靡婉
曲獻笑解顔遂成一家之學
而人情世態之故盡焉蕉翁
已沒慕其流風者靡不尸祝
之也而吾鄉呑溟弱冠好其

道而木鐸鄉黨矣及獲蕉翁
時雨之什手筆信奉韞匱以
其題詠募於同好尸祝先師
云嗟乎齊民諷詠　朝野馳
毛頴兢材幹此亦太平之樂
事哉此亦太平之樂事哉
寶歷癸未之冬

菜蕪主人識

昭和四十年五月吉
雲英末雄写之

原本中村俊定先生蔵